

# 子どもが緊急搬送された家族の情動性の実際

著者	田中 順子
発行年	2014-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/7339">http://hdl.handle.net/10422/7339</a>

氏 名	田中 順子
学位の種類	修 士 (看護学)
学位記番号	修 士 第 1 7 7 号
学位授与年月日	平成26年3月10日
学位論文題目	子どもが緊急搬送された家族の情動性の実際

## 論 文 内 容 要 旨

※整理番号	182	(ふりがな) 氏 名	たなか じゅんこ 田中 順子
修士論文題目	子どもが緊急搬送された家族の情動性の実際		
<p>(研究目的)</p> <p>子どもが緊急搬送された家族の情動性を明らかにすることである。</p> <p>(研究方法)</p> <p>研究デザイン：質的帰納的研究</p> <p>研究対象：緊急搬送された子どもの家族で 20 歳以上の方に面接を依頼する。子どもの状態が改善し退院の見込みがある家族もしくは、退院後に外来フォローをされている子どもを持つ家族 7 組。</p> <p>調査期間：本学倫理委員会の承認後～平成 25 年 12 月（予定）</p> <p>本研究は滋賀医科大学倫理委員会の審査を受け、承認を得た（承認番号：25-14、承認日：平成 25 年 7 月 18 日）</p> <p>(結 果)</p> <p>236 のコードより 44 のサブカテゴリー、10 のカテゴリーが抽出した。【子どもの急変にパニック】 【子どもの緊急事態に狼狽】【病状の深刻さに呆然】【病状の進行に焦り】【搬送前の意に染まない対応に不満】【期待に添わないケアや救急体制に苛立ち】【救命できる医療施設への搬送に】 【搬送先の診断とケアに納得】【医療者の労いに安堵】【子どもの治癒を切望】</p> <p>(考 察)</p> <p>家族は、まず最初に、子どもが重症な病気になったことに大きな衝撃を受けていた。次に、救急受診の看護師のあわてようを見て、緊急事態であることを実感し、子どもの緊急事態に混乱していた。家族にとって子どもが透析や輸血といった大変なことをしないと助からない事態に何も考えられなくなり、子どもの顔が日に日に浮腫り、薬を飲んでも症状が改善しないことに心配を募らせる状況となっていた。家族は、搬送前の何も訳がわからないでいる状況の中で医療者の不用意な言葉や、適切な声かけを望んでいることを思いを抱く。搬送後も、はじめて来た病院で子どもの検査に同行してもらえなかった。看護師に依頼しても家族の思うようにしてもらえなかったことに落胆した。しかし、緊急搬送された病院で専門的な治療を受けることで安心感を抱き、わかりやすい治療の説明をうけることにより、子どもが治る可能性を期待していた。家族は子どもの病気や搬送で心細い思いでいる中で、看護師の声かけに癒され、勇気をあたえられ頑張りを認められ、心細さを察してもらえたことに喜びを得ていた。同時に終始一貫して子どもが治ることを信じていることがあきらかとなった。</p> <p>(総 括)</p> <p>緊急搬送された子どもの家族の情動性の実際は、【家族は子どもの急変にパニック】を起こしつつも、医療機関を受診して、【子ども緊急事態に狼狽】し、【病状の深刻さに呆然】とする。【病状の進行の焦り】【緊急搬送前の意に染まない対応に不満】を感じ、家族の【期待に添わないケアや救急体制に苛立ち】をもつ。緊急搬送されるにあたって、【救命できる医療施設への搬送を期待】をし、【搬送先の診断とケアに納得】して、【医療者の労いに安堵】する。医療機関に受診してから容態が落ち着くまで、家族は常に【子どもの治癒を切望】しているということが明らかとなった。</p>			